

2024年第13回村上春樹国際シンポジウム

# 村上春樹文学

におけるウェイ・オブ・ライフ

予稿集

way of life

会場 早稲田大学早稲田キャンパス(東京都新宿区西早稲田1-6-1)  
開催期間 2024年7月13日(土)・7月14日(日)  
主催 淡江大学村上春樹研究センター  
協催 早稲田大学国際文学館(村上春樹ライブラリー)  
後援 独立行政法人国際交流基金・公益財団法人東芝国際交流財団  
台湾日語教育学会・韓国日語教育学会・村上春樹研究フォーラム

C3-1 「私的言語」をめぐる戯れとスイング ―村上春樹文学における「ウェイ・オブ・ライフ」― 鄒 波 227

C3-2 スウェーデン映画「小人と踊る」(Dansa med dvärgar)における Way of life ―「妻」の自立の物語として― 山根 由美恵 235

C3-3 『七番目の男』から見る「ウェイ・オブ・ライフ」―文章構成を中心に― 杉田 佳世乃 243

C4-1 フィリップ・マローウの教えるハードボイルド・ウェイ・オブ・ライフ ―村上春樹とレイモンド・チャンドラー― 藤城 孝輔 251

C4-2 『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』における村上春樹のフィッツジェラルド受容 ―「自立する娘」と女性の生き方― 大野 健 259

D1-1 『騎士団長殺し』の「私」の「ウェイ・オブ・ライフ」―その「隠遁」の力― 范 淑文 267

D1-2 村上春樹『騎士団長殺し』論 ―語り手「私」のウェイ・オブ・ライフ― 葉 爽 275

D2-1 Adaptation, Love, and Humanity as a Way of Life in Haruki Murakami's Dance Dance Dance 余 盛延 283  
\*招待発表\*

D2-2 The Way of Life: The Relation Between Translation and Comparative Literature in World Literature: A Case Study of Haruki Murakami (Spanish Edition) 戴 毓芬 291  
劉 莉美  
劉 恩恵

D3-1 村上春樹「アイロンのある風景」論 ―登場人物たちにおける「ウェイ・オブ・ライフ」― 楊 琇穎 293

D3-2 《新しい作品論》で読む「タイランド」と村上春樹の「死生」論 ―「私たちはいつか何のために生きているのか」― 相沢 敏彦 301

D3-3 村上春樹「クリーム」におけるプロトタイプとインタープロトタイプの老人観の比較 ―〈ウェイ・オブ・ライフ〉をキーワードとして― 佐古 恵里香 309

D4-1 《ぼく》の way of life ―村上文学の主人公たちの隠蔽― 石川 隆男 317

D4-2 村上春樹における「文体」の創造 ―「私」と「ぼく」の「ウェイ・オブ・ライフ」― 呉 勤文 325

六、講演者、パネリスト、発表者プロフィール..... 332

七、コメンテータープロフィール..... 334

八、準備委員会..... 335

九、スタッフ..... 336

十、2025 年第 14 回村上春樹国際シンポジウム発表者募集のお知らせ..... 337

十一、2025 年第 14 届村上春樹国際學術研討會・徵稿事宜(中文版)..... 339

十二、2025 年第 14 回村上春樹国際シンポジウム申込書..... 341

十三、『村上春樹研究叢書』第 12 輯掲載論文募集のお知らせ..... 343

十四、『村上春樹研究叢書』第 12 輯刊登論文徵稿事宜(中文版)..... 345

十五、『村上春樹研究叢書』投稿書式見本..... 347

十六、2024 年度「台湾日本語教育研究」国際學術シンポジウムのお知らせ..... 349

fully shown in Mankani's case, translation and comparative literature are the media and approach of world literature.

村上春樹『アイロンのある風景』論  
――登場人物たちにおける「ウェー・オブ・ライフ」――  
堀 瑞穂 (清泉科技大学准教授)

1. はじめに

村上春樹は、『新潮』1999年8月号から同12月号にかけて、「地震のあとで」と題する短編小説を連載した。本論の考察対象とする作品『アイロンのある風景』は、その第2作目で、同誌9月号に掲載され、その後、短編小説集『神の子どもたちはみな踊る』（新潮社、2000年）に収録された。また、2015年5月刊行の『日本文学100年 名作選 第9巻 1994-2004 アイロンのある風景』（新潮文庫）にも収録されている。そして、この名作後のタイトルが『アイロンのある風景』であることから、この作品に書き込まれている親子が分かる。なお、連作短編『地震のあとで』は、いずれの作品も1995年1月に発生した阪神大震災を背景にしている。ただ、興味深いことに、村上には全編を通して、震災や被災地の状況を直接的に描くのではなく、被災地の外にいる人たちが目にしたり感じたりすることはないであろう空想感や孤独感を描き、震災で震った不安や悩みをあらわにしている。

こうした作品群の一つである『アイロンのある風景』は、家出少女の順子と、順子の遊び仲間である三宅と、そしてたき火好きの三宅とが、海辺でたき火を囲んで対話する様子を主眼に描画が展開する。その日の夜更け、三宅は順子と暮らす海辺に湧く、流木を修す。ただ、たき火が始まると、修は数箇を理由に先に帰る。順子と三宅は二人きりでたき火をするようになる。二人はたくさん話をして、その話の結末は、次第に、自分たちが抱えている不安の核心に深く入り込んでいくこととなる。そして、最終的に二人は、たき火が燃え尽きた後に一緒に死をめることを約束した。今が物語は、たき火が燃え尽きた後の悲しい雪国の中で終わりを告げる。

なお、こうした関係についての先行研究としては、ジャック・ロンドンの『たき火』を参照し、たき火を象徴として出典や論考や、近世文壇の『天』という作品と対比し、つづいた平野芳樹や高知伸の論考が挙げられる。さらに、作品のサブタイトルに着目した岸村 裕や、本作品における「三人称」を駆使した手法に着目して作品分析を行った渡辺博の論考も見られる。

こうした点を踏まえ、本発表は、これらの先行研究を念頭に置きつつ、社会的な観点で作品を読み解くことにより、作品の読み手新たな視座を見出すことを試みるものである。

<sup>1</sup> 田辺孝「地震のあとで、被災者こそ―村上春樹『アイロンのある風景』の読み出し」『ジャック・ロンドン』(東京：『文壇』(文芸春秋)の特別号)2008.5

<sup>2</sup> 平野芳樹「村上春樹『アイロンのある風景』論―春樹の『天』と『神の子どもたちはみな踊る』」『日本文学』2007.4

<sup>3</sup> 岸村 裕「村上春樹『アイロンのある風景』論―修の物語をめぐって」『日本文学』2012.12

<sup>4</sup> 渡辺 博「『天』の『天』を考へる」『天』(村上春樹『アイロンのある風景』)『天』(日本文学)2013.4

<sup>5</sup> 渡辺 博「村上春樹『アイロンのある風景』論―春樹の『天』をめぐって」『日本文学』2013.4

目次

2. 様々な登場人物

物語の舞台は、福島県で有名な茨城県東茨城町である。当地は、東を太平洋、西を霞ヶ浦湖と利根川水系に囲まれており、利根川に近いことから古くから水運が発達していた。ただ、明治時代には鉄道輸送が本格的に発達するにつれ、地域の水運システムが次第に没落。この地は孤立状態になり、「陸の孤島」と呼ばれる時期もあった。しかしその後1960年代の経済的発展に伴い、工業用水の供給に恵まれた同地では、金属工業が盛んとなり、この地域は再び発展を遂げる。

一方、作品では、順子は高校3年生のときに、水戸市にある実家を出て、「南沢からでために電車を取り回して、茨城県の海岸の小さな」(p.58)、「名も知らないことのない町」(p.58)にやってきてしまっている。つまり、彼女が身を置いているこの町は、周囲には比較的小さいものであることが分かる。そして、このような舞台設定には、村上の独自の考えがあるように思われる。

こうした中、順子は、たき火をしながら、三宅に次のように答えている。

「三宅さん、火のかたちを見てるとき、ときどき不思議な気持ちになることない?」  
／(中略) とうして火を見てると、わけもなくひっそりとした気持ちになる」(p.63)

そうした順子の問いに対し、三宅は次のように答える。

「火のうのはな、かたちが自由なんや、自由で、見ているほうの心次第で何にでも見える。」／(中略) 「火が自由になるには、自由になる場所をうまいことこつちでこしらえたらなあかんねん。そしてそれは誰にでも簡単にできることやない」(p.63-p.64)

ここで、これら二つの語りに関連すると思われる、村上春樹が『職業としての小説家』での「学校について」と題する文章における一文を以下に紹介したい。

僕が子供だった頃は、社会そのものに「枠組み」がありました。だから個人と制度のせめぎ合いの問題も、そのスペースに収容されていくって、それほど大きな社会問題にはならなかった。(中略) バブルの時代も終わった今となつては、そういう避難スペースを見つけることが難しくなっています。大きな流れにまかせておけばなんとかなる、というようにおぼろげな解決方法はいまは成り立たない。(中略) ノという「逃げ場」の不足した社会がもたらす教育現場の深刻な問題に対して、我々は何と

<sup>6</sup> 渡辺 博「『天』(渡辺 博)であったが、佐賀県佐賀市と区別するため、1995年の市制施行の際に佐賀市と改称された。

<sup>7</sup> 村上春樹『職業としての小説家』(メット・パブリッシング、2015.8) p.207-p.211

が確たる解決方法を見つけていく必要があります。(中略) 『簡単に言えば、誰か一人が解決方法です。誰か一人が自由に入っていく。そこから自由に出て行くことができます。それは言うなれば「個」と「他者」の対峙の中での中間領域に属する場所です。(中略) その種は「個の回復スペース」と呼ばれている。『中略』／もしそのようなカスタマイズの「個の回復スペース」を引入れることができた、そしてそこで自分に合ったもの、自分の存在に合ったものを見つけた、その可能性を自分のペースで伸ばしていくことができるなら、うまく自然に「制度の壁」を克服しているのではないのでしょうか。しかしそのためには、そのような心のあり方―「個としての生き方」を理解し、評価する共同性のあるような家庭の後押しが必要になってきます。

『アイロンのある風景』では、順子、三宅、修の3人の生き方は、まったく別々のものである。だが、3人が集まってたき火をするという行為は、「個としての生き方」という共通点にうまく合致している。つまり、たき火には特別な意味があり、詳細は後述することとするが、簡単に言うと、たき火をすることや、その火の中に、社会的にはくた、もしくは孤立している人々が息抜きのできる場所を見つけるもしくは見つけたいと願っているものである。そして、上掲の村上の言葉を引けば、村上、こうした「個の回復スペース」を上げ、それを下へ押し付けるといった考えや価値観を具現化し、自然発生的なものであるべきだと考えを示している。いわば、このたき火の場所は、漂流木が集まるといった、村上が直感的に自然に形成された場所である。そして、その場所は、人の住む地域から離れた町に位置しており、「個人の回復空間」を具現化したものだと考えられる。

さらに、流木を積み上げることやたき火をする自体も、一種の儀式的な意味を持つ。つまり、その上、順子と修とが、三宅の提供するウイスキーを受け取り、それを一緒に飲むといった行為も、そのグループ特有の儀式的行為と考えられる。なお、社会学においては、個人やそれらの集合は、個人が集団に集合されることを強制するといった、重要な要素である。また、同作では、3人が「誰か一人が社会から除外された存在」として描かれており、ある程度は、社会の主流に受け入れられない「存在である」といえる。そのため、除外されたこれらの人々、過度な干渉を受けつつも、過度な距離感を保ちながら集団関係を形成している。それは、村上が言う「個の回復スペース」における「回復」の機能を示していると考えられるのである。

また、火の揺らめきや炎は、人々の心に暖かさをもたらす。さらに、現代文明のみならず、古くより、火や炎には、温暖、静寂、照明、危険の解除などといった多岐の機能を有している。つまり、火の揺らめきや炎は、長い歴史の中で人間に寄り添い、深く知られられてきたのである。また、現代でも、インテリアやデザインとして、例えば、暖炉の照明を暖色系にすることで、暖かく快適な空間を創り出すといったケースは多く見られる。つまり、われわれの身近な日常にも、暖かくて居心地よき感じさせる儀式的な小さな空間として、

「個の回復スペース」が存在するのである。ただ、本作では、このような空間が、彼らの欠陥も浮き彫りにするのである。

### 3. 欠陥者たち

作中では、親子の絆の重要性があらわに表現されているが、これの反面は、親子の「エクストラコンフリクト」を示唆するものだと考えられる。なお、「エクストラコンフリクト」とは、単に父親に逆意することを指すだけでなく、男らしく、強く、リーダーシップを有する子を持つという無意識の願望に指すものでもある。また、その目的は、自分と父親から得られないような愛を受け、自らの成長に伴い、父親やそれ以外の男性に近づくことである。そして、「エクストラコンフリクト」を抱く女性はその目的意識において、しばしば父親のような人とその関係を築くことで愛情を獲得し、それにより、父親から自分と得られないようなものに感じたり思ったりしたことと生じた心理的衝動を、愛情で満たされるに値する存在であることを証明しようとするのである。そのため、彼女たちは父親の存在に、強い感情と特別な愛情を持つ男性に心奪われることも多く、その結果、父を不慮な状況に陥れてしまうケースも少なくない。

もともと、三宅は、作品の中で恋愛的好感を持たれることはない。彼は筋骨で、ほとんどはげており、体も細く、身なりも整えられていない。その上に、既婚で子供がいるという身分も、客観的にヒーローナードとして積極的に選ばれる存在ではなかろう。しかし順子は、彼に好意を示す。その鍵は、彼がたき火のテクニクをこなしている点にある。

現代では、幾多の道具を用いることで、いとも簡単にこなせることではあるが、「火を起す」ということは、古くは大変に価値のある技である。そして、三宅は、そうした技術に長けていう上に、順子や香寿を誘い、その場に参加させたといった「リーダーシップ」の要素も垣間見える。順子が三宅に引かれる要因も、こうした点にあるわけだが、同時に、順子の不幸な過去によりこうした思いが湧かぬ側面も少なからずある。

さて、一般的には、自分の欲求や希望を達成するために働いていると一言しよう。そして、今にはいって希望のまだとるべき高い生産性が求められる一方で、職業や職能が専門的・部分的な役割に偏っている。その結果、ある種の仕事は、単純化が進み、人間らしさを奪われることもあるだろう。つまり、生きるために働くという行為が、逆に、苦しみを与えたり、苦しみのもとになってしまったりすることもあるのである。これは、現代社会では、三宅弘三(三宅)という家にゆかりのある者にも起っている。そのとき、消費行動に対する役割を放棄していると言えよう。つまり、消費を消滅させるには、長時間を費やして生産活動に熱心に取り組む。その結果、冷感の心をもたず、利に費し、またそれを補償する。といったことを繰り返す中で、自分の心の中を自由に動かすのが、見えたかと思う。このように見れば、三宅の消費に対する意図は、現代の消費文化に対する、自己反照的なことと言えるであろう。

## 五、論文口頭発表・D3-1

また、三宅が描いた『アイロンがある風説』という絵画の中に登場する『アイロン』も、一般的な家庭においては、決して、貴重なものではなく、その存在もごく普通の風景と思える。しかし、この絵画は、三宅が過去を懐かしむものではなく、利益志向の資本主義の抑圧に自らを縛る過去を未知し、過去の自分と自己対峙し、画一化されている『標準化された、現に亡くなった、個性を失った自己』と感ずている。三宅の描いた絵画であると考えられる。つまり、『冷風集』と『アイロン』はそれぞれ、『能力を喪失した本態』と『抑圧された自己』とを象徴すると考えられ、冷風集が手帳をばして三宅の首をつむのは、この悲劇的な状態を象徴的に表したものである。

#### 4. ジャック・ロンドンとの関わり

順子は、高校1年生の夏休みに、読書感想文の課題があり、ジャック・ロンドンの『たき火』という短編小説を読んでいた。そして、三宅らとたき火をするときも、いつも作品『たき火』のことを思い、『物語の情景はとても自然にいきいきと』(p.52)する情景が順子の頭に浮かんできた。なお、夏休みの課題の読後の感想には、次のような描写がある。

死の瀬戸際にいる男の心臓の鼓動や、恐怖や希望や絶望を、自分自身のこのように切実に感じることができた。でもその物語の中で、何よりも重要だったのは、基本的にはその男が死を求めているという事実だった。(中略)この旅人はほんとうは死を求めている。それ自分がなすべきさいわいな結末だと知っている。それにもかかわらず、彼は全力を尽くして闘わなくてはならぬ。生き残ることを目的として、圧倒的なものは相手に闘わなくてはならないのだ。(p.52-p.53)

「生」の境には、順子や生主がいのちの場と見做されている。つまり、彼らは生命を肯定し、その生命のいのちを自らに受けとめようとしている。人間としていのちを愛する。また、彼女が考えた一般の人々は、彼らがプロットや善悪の判断に注目するであろう。しかし順子は、主人公の人々が困難に直面した時の態度や勇氣に注目している。そして、こうした彼女の感性は、時折には、自分自身の愛や勇氣に受けとれることに促された。彼女が「生」の境に向う意図の一端は、愛や学問がいのちの場となる道徳をたのまれたらかもしれない。つまり、社会の善悪の価値観から脱却するものとなるのが、結果として、彼女がどのような道徳をたてたことになる。「朝の8時(大まか)」にたどり着く機会をたてたということ。常に、ジャック・ロンドンの「生」には、順子や生主が愛を受け、彼女のいのちの中に、常にはその考えが在りており、こうした点から考えれば、順子は「生」への希望を持っていると推察できる。

なお、同作では、『ジャック・ロンドン』について、もう一つの描写がある。順子は「ジャック・ロンドンはずっと長いあいだ、自分は最後に海で溺れて死ぬと考えていた」と言っている。しかし、最終的に彼は、麻薬乱用によって亡くなったという。彼は、いわゆる

## 五、論文口頭発表表-D3-1

下層階級の出身で、世界大恐慌時代のアメリカで生きるために、いくつかの過酷な労働をこなさなければならなかった。そして、1900年代のロンダイク・ゴールドラッシュに関わった結果、作品『太き大』は誕生したのである。たが、こうした探検やその作業の業種で、彼の、致命的な傷害を受けることになる。そのため、その苦しみから逃れるために薬物により自殺を遂げる。もしくは、痛みから逃れるために、薬物を過剰に摂取したことにより死に至ったとされている。また、そのような生活経験から、彼は、自身と社会との微妙な関係を嗅ぎ、腐敗という表現を創造したと思われる。

なお、社会学者のエミール・デュルケームは、自殺の原因は社会に由来するとしている。つまり、景気が悪化したり経済が急速に成長したりすること、社会に揺れが生じ、人々が抑制していた欲望や欲が拡大したり、道徳や社会規範が機能しなくなる、もしくは大きく変化し、このような状況が社会に混乱をもたらし、こうした混乱が自殺行動を誘発する可能性があるとしているのである。

これを、ジャック・ロンドンのケースに当てはめて考えると、作家になった後の彼は、確かに生活には豊かになった。ただ、彼の人生活は次第に、空虚で無気力になった。そして、彼の自伝的書である「マーチン・イーズン」の主人公である船員ジックのマーティンも、作者であるジャック・ロンドンと同様に、貧困の時代であった自己価値と富裕になった際の自己の価値観とが衝突し、最終的には夢が破れ、海に身を投げるという結末を迎えるのである。

## 5. 終わりに

こうしたストーリーが描かれる『アイコンのある風景』は、日本のバブル経済が崩壊した後の、いわば失われた10年の終結となる1999年に発表される。なお、同年の社会状況を見れば、例えば、自殺者は33,048人1例より1例増加し男女に比べると、男性23,512人に対して女性9,536人であった。そして、このような男女数の差は、男性は直面した経済的プレッシャーを反映しているとも考えられる。言い換えれば、日本社会が男性に苛せる、社会組織的な期待とプレッシャーの表れでもあろう。

こうした社会状況の中、作品『アイロンのある風景』は、登場人物の一人はエリートラコンプレックス傾向があり家を捨てた女性で、もう一人は家庭に半ばに拒絶されて中年男というこの小説である。そして、この描写では、順子と三宅が育徳の恋人関係を形成しているように思える。しかし、順子についての描写を冷静に分析すれば、三宅に対する彼女の好奇心は「父」への探究心から生まれていることが分かる。つまり、二人の対峙や、彼女の三宅への気持ちは、血縁、性別、世代を超えてつ、しかし父と子の対峙や関係に近いものだと考えられるのである。

## 五、論文口頭発表・D3-1

こうした二人の人間関係を描いた回作に於いて、順子は、三宅の問いに対して、「自分がどんな人間に育つていくかを、考えたこともない。そんなことまで考えられない。だって、そんなに生き方をするまでもないだろ。だいたい俺のいうのには」(p.73)と答えている。そして、順子の順子は、叔父の故郷から直ぐ一面をうらなうと見立てる一方で、前述したように、他人に受けとめられざるを恐る直ぐ直前直後の性質のうなむれも現れてくる。なお、順子も三宅も、功利的主義の体制の制約を受け、意識的に無機的な生活状態に調整されている。また、無機的な生活には有機的な生活と異なり、個人の個性を否定して立てていることが多い。そして、三宅(父)はかつて、家族のためにこの世の中心として暮らした。暮らせることが多岐にわたる一方で、順子(兄)は、成長過程で感じた孤独感にひたっており、二人はお互いに、こうした面を補い合っているところである。

なお、村上は2020年5月10日に刊行された『文藝春秋』に、「猫を棄てる 父親について語る時」と題した文章を発表した。これは彼の作家生涯41年目にして、初めて家族に言及した内容となる。村上は、学問好きで勉強することが生き甲斐だった父親とは対照的に、自分は「学問」というものに対する興味が<sup>19</sup>あまりなく、「学校の成績は終始一貫してあまりばつとしないものだった<sup>20</sup>」として上で、次のように語っている。

そしてそのことは、父親を少なからず落胆させたようだった。自らの若い時代と比べて、こんな平和な時代を生まれて、何にも邪魔されず、好きなだけ勉強できるといいうのに、どうしても熱心に勉強し頑張るのうがと、僕の場合は思いがけず生活態度を見て、おそろしく惜しく思っていたことだろう。僕は戦時・戦中・クスの成績をとってもらったかったのだと思う。そして自分が時代に邪魔をされて歩くことのできたかたな人生を、自分にとって、親にも歩んでもらいたかったのだと思う。それとはまた全然違う視点で、思いがけずの気持ちで書いたはずだ。<sup>12</sup>

また、合わせて、元々は字でであった父親が、日中戦争の勃発により、強制徴用軍役に従軍せざるを得なかったと書かれている。そして、その父親は「兵に任じたり、父兄は、非常に大きな心の外傷を経験したものである。また、その父親は「兵に任じたり父兄に合する」という句号も外れているが、これは、憎恨であらなから兵士として戦を費やしたことを命じられた義理を表しているものである。ここに、こうした一途の行動が、彼らの心にもどのような強い傷痕と痛みを生みながら、想像し難い。そして、このように命の運命の不運が、村上と父親との関係に、何らかの影響を与えていたことも考えられる。

さらに上の「藤巻を」で父親について語るときには、次のような記述もある。

\* 「自殺論」<https://zh.wikipedia.org/wiki/%E8%87%AA%E6%8D%80%E8%AE%BA>

<sup>18</sup> 引用は村上春樹『猫を飼える 父親について話るとき』(2020.4、文藝春秋)による。p.58

五、論文口頭発表-D3-1

学校の授業はおおむね退屈だったし、その教育システムはあまりに画一的、抑圧的だった。そのようにして父は慢性的な不満を抱くようになり、僕は慢性的な痛み（無意識的な怒りを含んだ痛みだ）を感じるようになった。<sup>11)</sup>

さらに、村上が、学業、結婚、そして有名な作家としての道を歩んでいく過程において、父親との関係が険悪であったことも述べられている。つまり、言い換えれば、村上と父親とは、互いに相手に対する理解が恐ろしく稀薄、もしくは良好だったとは言えない状況であったのであろう。また、それが村上の大きな遺憾となっていることにも、同作で触れている。そして、これらの問題は、高度な集団意識や利益志向の社会制度が、個人や家族を振ることに起因しているのではないかと考えられるのである。そこで村上は、「アインのいる風景」を通じて、父親との関係が親子間の隔たりを表現したいと考えているのかもしれない。いわば、われわれに利益志向の社会制度がどれほど危険であり、息抜き的重要性を呼びかけているのではないかと考えるのである。

テキスト 『神の子どもたちはみな踊る』（新潮文庫）（新潮社、2002.3）

<sup>11)</sup> 前掲村上春樹『影を棄てる 父親について語るとき』p.69-p.61

五、論文口頭発表-D3-2

『新しい作品論』で読む『タイランド』と村上春樹の死・生・観  
——「私たちはいたい何のために生きているのか」——  
相沢 義彦（早稲田大学高等学院教諭）

世界観認識の転換を求める『タイランド』と研究の概観

『タイランド』には「生きること死ぬることは、ある意味では等価なです」という鍵的な命題が示されている。本シンポジウムのテーマの典拠となった『八月の魂』にも「死とは変形された生に過ぎない」とあり、生と死を対価として捉えない『死生観』は村上春樹文学を動かす上での重要な鍵であると考える。

本作には「いったん放棄してしまおう」と、それは強固になりす、<sup>12)</sup>「言葉は石になります」といったものもあるが、こうした概念は通常の世界観からすると「謎」として存在する筈のものである。その証拠として先行研究でもこれらの謎について作品内部における有機的な連関性から、その内的必然性として明らかにされたものは見られない。しかし、末尾の『左編』のエピソードの意味も含め、作品における〈言葉のしくみ〉に従ってこれらの謎を解き明かす事で「何を語ろうとしているのか」に近づく事こそが作品を読む意義であると思われる。

その点にはこれらも現在、謎として受け止めている自らの概念を壊していく必要があるだろう。謎であったものが明確で解くとなった時、自らの新たな世界の捉え方が再構築されたと言え、その上で作品を読み返す時と捉える時とではまた違ったメッセージが浮かび上がることになると思われるからである。そのようなメッセージこそが語り手の伝えたいことには以前よりもより近づく得たものだと考えるが、その意味でこうした種類の小説は謎を通して私たちが新たな枠組みで世界を捉えることを要請しているように思われる。

従って、本発表も謎を解く術で進めていくが、それは別に好奇心からそうするのではなく、そのことを通して村上春樹の作品が示していることを読み取ることに「ききやかな試み」（『風の歌を聴け』）となると考えているからである。そして、そうした世界観は既存のものよりもより「深い」ものであると思われ、そうであるが故に私がこうした研究や発表を行なうことの根拠にもなっている。

『あの男』とは誰か

では、具体的にどう読み解いていけばいいのか。まず『あの男』とは誰かという問題から考えたい。結論から言えば、『あの男』とは母親の再婚相手（あるいはそれに類する関係）と思われる人物であり、その男との何らかの出来事により高校生の時、初恋を経験し、心の傷を30年間に亘って抱えていたことになると思われる。継父の母親としては「母親は、父親が死んだあと一ヶ月もたたないうちに、ジャズ・レコードのコレクションと大きなス